

## 19 チンゲンサイ

### 地域慣行基準

#### 【化学肥料】

区 分	窒素成分量 【kg/10a】	備 考
県下全域	15	

※前年秋に有機物の腐熟促進のため、石灰窒素などの窒素を含有する肥料を施用した場合は、窒素成分で4kg/10aを上限に、施用した窒素成分を地域慣行基準に加えることとする。

#### (1) 特徴と吸収特性

チンゲンサイは、**定植から収穫までの生育期間が30日前後**と非常に短く、**肥切れを起こした場合に回復が難しい**ため、生育期間を通して安定した肥効が現れるような施肥を行う。施肥は原則的に全量基肥とし、10a当たり成分で窒素・リン酸・カリ各10～15kgを標準量として、低温期にはやや多めに、高温期には控えめにする。

養分の吸収は、定植後1週間は活着が十分でないため吸収量も少なく、**大半は収穫前の2～3週間の短期間に吸収される**。養分吸収量は、収穫時の目標株重を120～140g、目標収量を3,000kg/10aとした場合、**10a当たり窒素8～10kg、リン酸2～3kg、カリ12～15kg**である。なお、移植栽培での収穫時における一株当たりの養分吸収量に作期による違いはほとんどないが、一日当たりの吸収量には季節による差が見られる。

特に、**夏期は生育期間が短く、生長が速いため一日当たりの吸収要求量が多くなり**、収穫期には急速に養分が吸収され、収穫適期を過ぎると各種生理障害が発生しやすくなる。このため、**夏期は生理障害発生防止のため、施肥量を2割程度減らす**必要がある。